

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2192600142		
法人名	社会福祉法人 新生会		
事業所名	リハビリセンター白鳥		
所在地	岐阜県揖斐郡池田町白鳥386番地		
自己評価作成日	平成27年12月25日	評価結果市町村受理日	平成28年4月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&ji_gyosyoCd=2192600142-00&PrefCd=21&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	平成28年2月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

リハビリセンター白鳥は、西側から見守ってくれているかのようにそびえたつ池田山を見上げ暮らしています。グループホームのフロアからは、田園風景がいつも見られ、季節の移り変わりを目で感じ、肌で感じています。景色から、話の話題が広がり今年度は、座っていても花が見えるようにと、利用者と一緒に「花植え」に取り組みました。西日が入るからと緑のカーテンを作ったり、フェンスにかけたり飾ってみました。季節ごとに楽しめる花見やドライブは継続して活動しています。また、当施設は、併設でもあり最大限活かし、グループホーム、特養、デイ利用者との交流を深めリハビリ体操を一緒に行なったり利用者も行きたい場所に行ったり自由に暮らしています。リハビリルームやカフェは、施設内の人や家族に限らず、地域の方や他施設等外部の方が利用できる場所となっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域密着型特別養護老人ホームなどやカフェが併設されている事業所である。利用者に時間をかけてアセスメントを行い、一人ひとりの状態や行動を把握してカフェや屋外へ自由に出かけることを支援している。利用当初は、暫定の介護計画を作成し1ヶ月間アセスメントして利用者、家族の意見等により変更している。計画の見直しは3ヶ月毎であるが、状態によっては2ヶ月で見直すことも行っている。リビング等に、利用者と一緒に作った花餅や行事の写真、地域の広報誌が飾られている。落ち着いた家庭的な雰囲気を大切と考え、作品や写真など飾り方に気を付けている。廊下の日当たりの良い場所に1人用のテーブルが置いてあり手紙を書いたり、パズルしたり自由に使うことができる。

Ⅴ. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	白鳥10ヶ条を毎日、朝礼で1つを取り上げて「読み合わせ確認」をし意識付けとして継続している。全体朝礼の申し送りを職員間で伝え、利用者の状態を把握しケア対応に繋げ実践している。	利用者主体やチームケア、接遇など職員がいつでも振り返られるように具体的な言葉を理念としている。朝礼で職員が大切にしたいこと、気を付けたいことを一つ読み上げ職員同士が意識し合えるように工夫している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	行事によっては、地区に向け各家庭に回覧して頂いたり、掲示板にも貼って頂いている。また、「しろとり」の地域新聞を頂き利用者と一緒に読んでいる。春の礼祭や子供みこしの受け入れを利用者と共に行なっている。	自治会の広報誌を事業所内に掲示し利用者の楽しみとなっている。事業所の広報誌を自治会に回覧してもらい行事の案内をしている。事業所が働きかけて神楽や子供みこしが事業所に立ち寄ってもらえるようになった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キッズセミナーで当事者理解の為に障がい者体験等企画したり、学校からの依頼で、職員が学校へ出向き「仕事職業講話」でどんな仕事なのか子供たちに分かりやすく伝え地域に向けて発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は、防災訓練に運営推進委員の方にも声を掛け参加して頂く。「夜勤帯設定」等実際に避難誘導を職員と一緒に関わり課題解決に向けている。今年度から会議録を利用者家族に封書に入れて発信している。	外部評価の結果を話し合い、会議録を家族に送付するようにした。会議のメンバーに避難訓練に参加してもらい避難方法や放水訓練などのアドバイスを受けた。施設の祭りについて話し合い地域と協力して取り組んだ。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に担当課からの参加あり、情報交換の場となっている。地域の方にカフェやリハビリルームを町民に活用してもらえる様施設を開放している。	市町村担当者に働きかけ、併設されているカフェやリハビリルームを地域の方に活用してもらっている。市町村の依頼で地域ケア会議や民生委員の合同会議に出席して市町村担当者と意見交換している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、会議で具体的に勉強会を実施し理解を深めている。また、毎月の会議では、ヒヤリハットの振り返りを行いケア確認を行なっている。職員の見守りの方法を徹底し、日々のケアでは、利用者の抑圧感を招いていないか職員間で点検している。	契約時に利用者と家族に身体拘束を行わないことを説明している。時間をかけてアセスメント行ない個別のケアについて職員間で話し合い拘束を行わないように取り組んでいる。法人独自に設置しているサービス評価委員会にいつでも相談できる体制である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会議等の勉強会で理解を深めている。利用者の24時間情報を職員で共有しケア対応している。また、外部評価委員会を設置しており、委員会の方が随時、訪問し評価して頂くことにより、施設の運営に役立てている。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	会議や勉強会を通して学んでいる。現在、権利擁護等の制度を利用している利用者はいないが、今後対応が必要と思われた際は、関係機関の紹介を行なっていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、本人・家族と一緒に契約書を説明し、不明な点や疑問等を確認し合い理解をして頂き同意を得ている。入所1ヵ月間は、家族も心配され職員から細かく様子を伝える様に心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時の会話から家族の思いを汲み取り話やすい雰囲気にもなっている。又、意見箱の設置、外部評価委員による「よろず相談」の機会を設け出した意見を反映させている。	家族の面会時に生活の状況を伝え意向等を聞いている。利用者には、日常の会話から要望等を聞いている。意見等があった時は職員間で話し合い情報を共有している。利用者の希望で一時帰宅した事例もある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	いつでも意見等聞く機会を設けてもらえ、話しやすい環境となっている。チャレンジシートをもとに5月に目標の提示をし年度末に振り返り、面接を行なっている。	責任者は、管理者等に自由に相談して良いと職員に伝えている。定期的な会議で、利用者のケアや行事、勤務体制など話し合っている。職員によって面談する管理者を変えるなど意見を言いやすいように工夫している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	チャレンジシートをもとに面接を行い、働く条件や要望等を整えることができる。また、年度末には特別表彰や事例発表による表彰もあり、部署間のチーム力を高めることも行なっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実践と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内のケア専門委員会、勉強会、研修会に参加。専門性の向上に努めている。また、施設内でも委員会活動をしており、これらの参画により職員の自立支援も継続して行なっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	毎月、法人内のリーダーが集まり、運営等の情報交換を行なっている。他部署の方法を自部署で活かしたり、ケアの悩みをだしたり、一緒に課題解決に導いてくれたりと共有する場ができ、部署に報告している。		

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前訪問等で生活状況・課題の把握に努めている。利用者によっては、入所前にショートステイ等を利用してもらいながら人的、物的環境に慣れてもらうように支援している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の困っている事や思いを聞き、ご家族の心理的なケアを行なう様に心かけている。入所前の本人への思い等の話を聞く事が関係を築く為に必要な事と感じ状況に応じ時間を取り実践している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族から生活の課題に対する不安の言葉があった際に、それに見合ったサービスを提供できる様、事前にケアプランをたて説明。入所の際に不安を軽減できる様支援を行なっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のやってきた事や、やりたい事等、本人の強みを活かした支援をしている。今年度は、緑のカーテン作りや座っていても見える様に一緒に考えて花を植えを利用者と共に行ってきた。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には、日頃の様子を細かく伝えることで、家族と職員の思いが徐々に重なり、本人を支える為の協力関係が築けることが増えて来た。面会時、ゆっくりと過ごしてもらえる様に場を提供している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	デイサービス利用の顔馴染みの方と昼食を共にしたり、日中を一緒に過ごす利用者も見える。地元のスーパーへ買い出しに利用者で行き、昔の馴染みの方に声を掛けられたり地域との繋がりも大事にしている。	アセスメントで馴染みの人や場所を把握している。利用者が一時帰宅した時に近所の方と会い喜ばれた。馴染みの生活空間を家族と職員が共有することが出来た。馴染みの店に買い物に行き知人に出会った。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	耳が遠く会話がしづらい利用者の方には職員が間に入り会話がができる様介入している。利用者同士「その人なり」を理解できる様に職員が働きかけ日々、ケアで実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終末期を迎え亡くなられた後でも、毎年行われる物故者慰霊祭で、ご家族を待招き、故人を偲ぶ会を開いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で声かけ、言葉や表情、仕草などから汲み取り把握に努めている。また、利用者からの言葉、仕草等をケア記録SOAPで表し具体的にケアに繋げ実践している。	利用者との会話の中から意向などを聞いている。利用者の思いを職員間で話し合い把握に努めている。困難な場合は、利用者個々にコミュニケーションノートを作成し職員間で共有できるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族、ケアマネージャーから自宅での様子等聞き、どんなこだわりがあったのか等、生活スタイルを把握し環境が変わっても自宅での生活と極端に変わらない様支援に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活リズムを大事にし、日々の精神面、身体面の状態把握に努めている。利用者の「できる力」を職員間で共有し支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意見を確認しつつプランを作成している。また本人もチームの一員である理解の下、入所オリエンテーション、カンファレンス等に参加をして頂き「思い」が言える場を設けている。	利用当初は、暫定の計画書を作成し1ヶ月間アセスメントして、利用者・家族の意向等を聞き変更している。担当者が定期的にモニタリングを行い、利用者・家族に説明している。利用者の状態により計画期間を変えている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録は、パソコン入力。その記録を職員間で共有し同じケアを提供できる様コミュニケーションを大事に努め実践している。会議、ミーティングで情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人・家族からの要望にできる限り「No」と言わず、オプションサービスを提示しながら要望を叶えられる様に提案している。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の理美容に訪問してもらい協力を頂いている。また、地域の図書館に行きカードを作成し行きたい時に行けるように取り組みを継続している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者全員がホームDrを利用している。往診時に医師に伝える内容を職員間で話し合い、共有し状態報告をしている。「痛み等」伝えられる利用者には、職員がサポートしながら伝えてもらい処方をしてもらっている。	事業所は、かかりつけ医に定期的に往診を依頼している。歯科、眼科などは家族が付き添って受診している。受診の結果は家族に確認したり、看護職員がかかりつけ医に確認したりしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の支援の中で変化、気づきを看護師と共に情報共有、相談し必要な支援の検討を行なっている。看護師からの専門的見地からのアドバイスも受けケアに活かしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は家族から状態を聞いたり、職員が見舞いに行き、状態の把握に努めている。また、退院後の生活について病院側と話し合いを行い医療面や精神面のケアに努め、以前の暮らしができるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に事前指定書の記入を依頼し、終末期について考える機会を設けている。状態の低下に応じて、その都度カンファレンスを行ない家族と一緒に今後の支援方向について話合っている。今年度、1名の看取りを行なわせて頂いた。	契約時に利用者、家族に事業所の方針を説明し、事前説明書で同意を得ている。状態の変化に伴い重度化や終末期への対応について話し合い意向を確認している。悩まれる家族には、納得できるまで時間をかけて話し合っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応についての勉強会を開き、落ち着いて対応出来るように努めている。また緊急時や夜間帯の対応方法のマニュアルがあり、一人一人の緊急時の搬送先など細かい事も記載されている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災訓練を年2回開催している。利用者・家族・職員・地域・消防署員と共に実施している。また、毎日夜勤リーダーを決め、夜勤リーダーが指示をだし行動するように継続している。	併設の施設合同で年2回の避難訓練を行っている。運営推進会議と日時を合わせ、地域の代表者や家族も参加し意見を聞いた。併設施設が主体となった訓練に参加しているが、事業所主体の訓練が行われていない。	併設の施設合同で避難訓練を行っているが、事業所から出火した場合の対応を話し合うなど事業所を主体とした訓練等も検討していただきたい。

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人ひとりの気持ちを大事にしその方にあった声掛けを職員が共有し実践している。本人の出来る力を、活用し手を出しすぎない様に見守り、待つケアを心掛け継続している。	利用者のペースに合わせて一緒に考えながら支援している。職員は、本人の前で本人のことを話すなど第三者的な対応をしないように心掛けている。排泄時はアイコンタクトなど利用者のサインを見逃さず誘導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者一人ひとりに合せた声かけを行っている。利用者の言葉から記録をSOAPで表し思いや、考えを汲み取っている。意思表示が困難な方には、表情や反応をキャッチしながら自己決定できるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとり、一日の流れは持っているが、その流れを押しつけず、過ごしたい場所で過ごせるよう、それに合わせた対応を心掛け実践している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一人ひとりの個性を理解し、その人らしさを大事にし服装や日頃の身だしなみに気を付けている。理美容時、利用者が髪にこだわったこと等伝えたり「その人らしさ」を大事にしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼夕は、食事を厨房からとっている。利用者に合わせ、刻んだり、一口大に食べやすい様に手を加えている。盛り付けと一緒にやつでもらったり、ティータイムのおやつ作りは、何を作るか一緒に考え作っている。	食事の盛り付けや下膳の手伝いなど利用者は出来ることを手伝っている。利用者とおやつを作ったり、外食に出掛けたりしている。朝は、好みに合わせパンかご飯を選ぶことも出来る。嗜好品の持ち込みは自由である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの体調と一日の摂取量は把握している。風邪等で食欲が出ない時は、利用者の好きな物等を食べやすくしてだしたり、咽や飲み込みが悪くなった場合は、		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの力に応じた歯磨きの手伝いをしている。利用者によっては、舌下ブラシ、スポンジ等で口から食べ続けることができるようマッサージを行っている。また、お茶でうがいをしたりしている。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入所時に、排泄のアセスメントを行い細かい情報を記録し介入方法を共有していく。利用者が動き出したら、周りの方に気付かない様にさりげなく介入させてもらい、状況に応じてトイレの使用場所も考え実践している。	トイレに座って排泄することを基本としている。利用者の能力を見極めて話し合い支援することにより、数週間で改善できた方もある。自立支援につながったことが職員のやりがいと自信になっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝、起床時に牛乳を飲んで頂いたり、朝食時にヨーグルトを提供し自然排便を促している。排泄は、利用者の身体機能に合わせ「トイレに座る」事を意識して配慮している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	特養の利用者と一緒に入浴している。顔馴染みの利用者と一緒に入浴出来る様配慮したり、拒否の方は、曜日を替えて入浴をしている。	利用者の希望で個浴や大浴場を選ぶことが出来る。大浴場では仲の良い利用者と一緒に入浴している。しょうぶ湯や柚子湯など季節を感じられるように工夫している。入浴の順番や時間、曜日など利用者の希望を聞きながら楽しく入浴できるように支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	在宅から変わらぬように、起きたい時に起きるスタイルで対応をしている。体調に合わせて対応をしている。また、日中の活動も促し生活リズムを整える様に努め、夜間の安眠に繋げている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師がセットしたものを再度介護職が確認し服薬している。服薬の際は、本人に名前を伝え、手のひらにのせ飲み込んだ処まで見届け、誤薬、飲み忘れがない様に実践している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者のできる力、得意分野を日々の生活から把握し、利用者の役割ができています。無理のない様にねぎらいの言葉や感謝の気持ちを忘れずに支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じて初詣、お花見、紅葉ドライブを計画し出かけている。本人の希望より住み慣れた家への一時帰宅を家族の協力により職員が付添い叶える事が出来た。	職員は、利用者の力を把握し併設のカフェや屋外へ自由に行くことを見守っている。買い物やドライブ、散歩など利用者の希望を聞いて外出している。専門学校の卒業式に出席したり、家族や学生ボランティアの協力を得て祭りに参加したりしている。	

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分でお金を持って管理している利用者は今も継続している。また、手元には持っていないが、必要な時に事務所から自分でお金を引出し、支出・残高を確認して好きなパン等を買っている利用者もみえる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者へ、下書き用の紙を渡したり、ゆっくりと手紙を書く環境を作ったり、利用者の希望に応じて日常的に電話や手紙を出せるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	新しい利用者が入所されたり、身体状態が変わった時等、その時々によりテーブルや食卓椅子、ソファの配置を工夫し利用者と一緒に考えながら決めている。また、花や緑を取り入れ目線に入るように空間づくりに努めている。	入口に利用者が世話するプランターを置いている。リビングを利用者が自由に行き来できるようテーブルの配置をしている。廊下の日当たりの良い場所のテーブルでは、手紙を書いたり、パズルをしたり自由に使うことができる。落ち着いた家庭的な雰囲気となるように作品などの飾り方に気を使っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人になれるちょっとしたスペース、気分転換できるような小さいテーブル、椅子を置き空間を設けている。その他、グループホーム内だけでなく施設全体で居場所となるスペースを作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時、布団や家具はご家族に自宅からもって来た馴染みの物を置いてもらっている。利用者が使いやすい様にベッドの位置を変えて、過ごしやすい（動きやすい）環境に配慮している。	家具等は、家族と利用者に相談しながら配置している。遺影や絵画を飾ったり、テレビ、布団、タンスなど使い慣れた物を持ち込んだりしている。一時帰宅した時に家族と一緒に撮った写真を飾り落着ける空間となるように工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	車椅子利用者が増え、利用者の動きによりテーブルや椅子、ソファの配置に留意している。また、トイレの曲がり角に手をぶつけやすい為、保護をつけ利用者が安全に行くことが出来る様に整えることができた。		